

中国で垣間見た植物

中山 洸

K. Nakayama: A glance at the Chinese flowering plants

はじめに

1985年10月10日～22日、長野県教育者訪中国の一員として中国に旅をする機会を得た。この旅の目的は中国の教育事情の視察および中国東北部（旧満州）における日本人公墓の参拝を通して日中友好を深めるということであった。そのため植物を調査する時間的余裕もなかったが、バスの車窓や街の中で見た植物の一端を記してみたいと思う。植物名も正確な同定をしていないので、属または科などの仲間としての日本名が含まれていることをお断りしておく。行程は東北部のハルビン、首都北京、古都西安、そして上海、蘇州であった。

図1. 中国の気候区分図



日中平和観光「中国旅行」より

1. ハルビンおよび方正県

ハルビンは中国東北部（旧満州）における中心地である。平均気温は最暖月の8月で21.2℃、最寒月は1月で-19.7℃とかなり寒い。北海道の中央部に当たるが、内陸に位置するため寒暖の差は大きい。

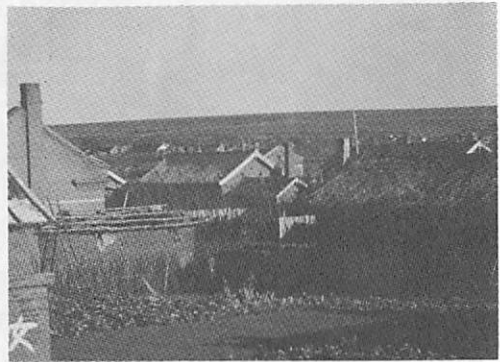
市内はイチョウ、ポプラ、ニレ、トネリコの仲間などの並木が美しく植えられている。中国ではどの地方でも並木として植えられた木の枝を切ることをしないので自然の姿の大木が見事である。道路わきの花だんにはオシロイバナやライラックが植えられ、その根もとには、ミチヤナギ、エノコログサ、アカザなどの仲間がほとんど枯れかかっていた。ハルビンの市の木はニレの木であり、市の花はライラック

であると聞いた。



ハルビン市のニレの並木

この周辺は、戦前には多くの日本人が開拓に入った地域である。郊外に出ると、ゆるやかに波を打つような丘陵地が果てしもなく続いている。しかも、見渡す限り農耕地（主として畑作地帯）となっていて森林らしいものはどこにも見あたらない。10月の今は、採り入れがすっかり終わっているのに、作物らしいものはほとんど見当らず、しかも、きれいにかたづけられているので、どんな作物を作ったのかもよくわからない状態である。おんどの燃料として一木一草たりとも無駄にしないとのことであった。わずかにトウモロコシの切株、ダイズの枝などが見られた。他にはアワ、キビ、コウリャンなどを栽培しているとのことであった。



ハルビン郊外の農村と地平線まで続く畑作地

ダイズの出産地は中国東北部とシベリアであるといわれ、野生のツルマメ *Glycine soja* Sieb. et

Zucc. を改良したものでトウモロコシのよくできる気候条件にあうとされ、この地方ではこの両者の栽培が特に多いようである。

ハルビンから 200 km 東方の方正県へ向かう途中もあたりの景観はほとんど変わらない。道路に沿ってはポプラ、ドロノキなどの並木が切れ目なく続いている。道路もまっすぐに地平線まで続くかと思われるほどで、この単調な景観でこの地方の広さをいやというほど味あわされた。



方正県への道 ポプラ並木(まだ若い木である)

このポプラは農耕地内にも 30~50 ha の広さを囲んで 1~2 列に植えられている。この地域で樹木といえば美しく並んで植えられているこのポプラだけである。ポプラの樹齢は 20~30 年位であろうか、中国が農業生産をあげるために人民公社を組織したころに防風、防砂を目的として植えられたようである。

ただ、この行程の途中で一回だけ、やゝ高い山の間を通過したことがあった。山にはシラカンバが見られ、その肌の白さが、なつかしく日本の山を思い出させた。他に、ヤエガワカンバらしきものも散見できたが、山全体を被っていたのは、樹高 3~4 m の広葉樹で茶色に枯れた葉をしっかりとつけていた。

バスの休息の時、近づいてみるとミズナラとカシワの木であった。カシワは一般に冬も枯葉をつけているのは知られているが、ミズナラとみられる葉も一枚も落葉せずに幹にしっかりとついていたのは不思議であった。種が異なるのだろうか、気候のためなのだろうか、調べてみたい興味ある事実である。

この他に方正県のある町の中でみられた植物としては、ヨモギ、メハジキ、オオバコ、イヌビユ、ナズナ(日本のものと大部異なる)、スイバ、ヒメムカシヨモギ、などである。また、日本人公墓のある丘でみたアカマツは果実の円いものと、先きのとがったものとの二つのタイプのものがみられた。また見学した中学校の理科室には、コウヤワラビ、ジュ

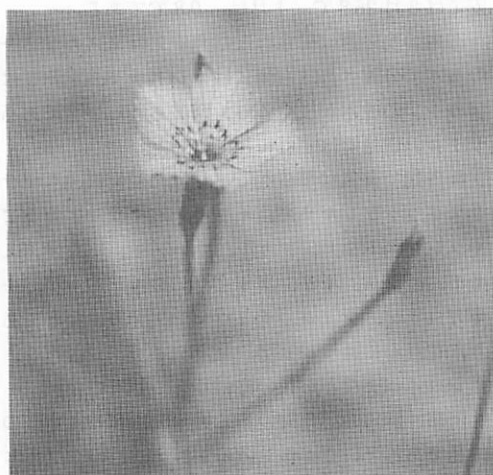
ウモンジシダ、オシダ、ゼラニウム、カリン(マルメロ?)などが鉢植えとなって窓際に並べられていたのを記憶している。

2. 北京および石家荘

ハルビンから北京にもどる。北京の空港から市内へ向けては何 km と続く直線の道路である。この道路の両側はヤナギ、ポプラなどの並木が見事に連続している。ヤナギはシダレヤナギ(垂柳)、と枝の垂れない柳(慢頭柳)とが交互に植栽されている。中国の絵や写真によく出てくるのはこのシダレヤナギであるが、これは *Salix babylonica* L. で中国原産の植物であろうと言われている。他にこの並木にはアカシアも時々みられたが、並木の間を通してブドウやカキの果樹園が広がり、このあたりは中国でも有数な産地であると聞いた。

ある公園の一角にある食堂で食事をした。公園内にはモクゲンジ、サルスベリ、カキ、カシグルミなどが所狭しと植えられ、自由に枝をのばしていた。公園といっても日本でみるクルミ畑やカキ畑のような感じである。

北京から万里の長城へはポプラ並木を長く走り、かなりの山道を登るが、この周辺の山は岩場が多く草本類の多い山である。谷筋に沿っては樹木がみられた。長城の築かれている山には比較的樹木も多いが樹高 3~4 m のものがほとんどで森林地帯と言えるほどのものではない。この時期はすでに紅葉したり、落葉をはじめているものがほとんどであった。ただ、長城の壁のかげに取り残されたように咲いていた一輪のセキチク(ナデシコ科)の仲間が印象的であった。



万里の長城に咲いていたセキチク
(ナデシコ科)の一種

明の十三陵のうち定陵を見学できた。この一帯には多くのコノテガシワがみられた。中国に来て所々でこの木をみてきたので少々気になり調べてみると

コノテガシワはウィグル自治区と青海省を除く中国全土に広く分布する中国の特産樹であることがわかった。日本では植木などになった小さな木が多いが、中国では樹高10~15mとなり、森となって育っているのが特徴であった。

北京から列車で石家荘市へ向かう。車窓に映る景色は相変らずポプラの並木と畑地である。石家荘市は長野市との姉妹都市ということでの訪問であった。河北賓館というホテルに入る。ホテル周辺にはマサキの垣根、カシグルミ、ポプラ、スズカケノキの大きな木が目立った。これらの木の下で雑草には、スベリヒユ、オヒシバ、エノコログサ、ナズナ、カナムグラ、アカザ、アオゲイトウ、メヒシバなど、日本の雑草に似た種が多い。また、ホテル前の大きな道路は交叉点となっていて、東西の並木はシダレヤナギ、南北にはアカシアが整然と植えられ、枝が道路に伸びて広がりトンネル内を歩くような感じで日本にもこんな並木の道路ができたならどんなに心が休まるだろうと思わずにいられなかった。石家荘市では芸術学院という学校を見学した。校庭はキリが多く植えられ、ポプラの並木もあったが、葉が大きく少々姿が異なるので聞いてみるとカナダポプラだと説明してくれた。花だんにはオシロイバナやカンナが目立った。

3. 西 安

西安は北京に比べやや暖かい地域である。北京の8月の平均24.8℃、1月の平均-4.7℃にたいし西安では8月25.8℃、1月は-0.8℃である。

市内の主要道は二車線となり中央はスズカケノキの並木で分離され、右側にはカシグルミ、左側にはアカシアの並木が枝を張り、家並も美しい町である。ザクロの畑は町はずれに目についた。

楊貴妃で有名な華清池でみられた植物は、ヒマラヤスギ、シダレヤナギ、イブキ、ポプラ、アカシア、モクレン、トウヒ、マサキ、ネムノキ、トウネズミモチ、ザクロ、キリ、アオギリ、カエデの一種、キミガヨラン、シュロ、チョウセンアサガオなどであり、花だんにはサルビア、ハクニチソウ、バラ、オシロイバナなどが花の終わりをつづけていた。

阿部仲麻呂の記念碑のある興慶公園には、中国の国花であるというボタンのほか、ミツバのまつ、ヒョウタンボクの種類、サクラの種類、ムクゲ、キミガヨラン、スズカケノキ、シュロ、カジノキ、トベ

ラ、コノテガシワなどをみる事ができた。また、小雁塔の周辺にはヤマブキやトウネズミモチなどが植えられ、ヤブタバコの種類、オオバコ、カタバミなど、陝西省博物館の中庭ではハナズオウ、ナツメツゲ、マサキ、シダレエンジュ、ザクロなどがまだ緑の美しい葉をつけていた。



小雁塔の庭で見たオオバコの種類

西安はシルクロードの出発点であり、終点の町である。人々のロマンを呼びおこす町として自然と人々の生活が調和した美しい町であった。

4. 上海および蘇州

上海は西安から東南に向けて2時間20分ばかりの飛行時間であった。8月の平均気温28.1℃、1月の平均気温3.1℃である。かなり暖かく上衣を脱いで歩くようであった。九州の南端と同緯度であるために、この時期も緑が目にしめるようであった。

空港の空き地にはセイトカアワダチソウの黄色の花が一面に咲いていた。クスノキの並木が多く、スズカケノキも緑の濃い葉をつけていた。また、アオギリやキョウチクトウも道路端に目立った。玉仏寺という寺の庭にはタイサンボク、ヤツデ、ソテツ、イヌマキなどが植えられ、南国の情緒が漂っている。

市内の緑もいっぱい、日本の夏を思わせる陽気であった。

上海から列車で2時間余りで蘇州へ着く。駅前には、ソテツ、シュロなど大木が目立ち、上海よりさらに暖かい地である。留園という公園には、ナンテン、ツバキ、カエデの一種、キョウチクトウ、クスノキ、シンパク（柏樹）、ザクロ、ジャスミンなどの他クコは花をつけていたし、ムラサキカタバミ、ヤブガラシ、ヒイラギ、イチヨウなどが夏の姿をみせていた。寒山、拾得の話で有名な寒山寺は庭の中央にシダレエンジュが何本か植えられ、大きなカキの木やコノテガシワなどの茂る小さなお寺であった。

蘇州の木はクスノキ、花はキンモクセイであると

のことであった。ここ蘇州では昔からキンモクセイとモクレンを植えると金持ちになるといい伝えられていると聞いたが、そのわけは聞けなかった。

上海から蘇州のこのあたりは大稲作地帯であり、畑作地はほとんどみあたらない。これから刈り入れが始まろうとしているところで、黄金の穂が見渡す限り、重い首を垂れていた。また、蘇州は水の都ともいわれ、水路が多く、水の豊かなところである。マコモやヨシ、ダンチクなどが、到る所にみられたし沼地にはボタンウキクサらしきものの大きなものがたくさん浮いていた。流れの弱い川の中には、ミ

ズアオイとおぼしきものが、水面を埋めつくしているのも遠望できた。

おわりに

2週間近くの中国の旅であったが、町から町を渡り歩く旅であり、山や野に出る機会がほとんどなかったので、中国の植物的自然を充分に見ることができず残念であった。

植栽種や雑草の中から目についたもののいくつかを書き並べてみたが、種名も不確実なものがあるので、ほんの読物的に読んでいただければ幸に思います。

〔植物ニュース〕 91. ヤシャゼンマイ *Osmunda lancea* Thunb.

長野県内のヤシャゼンマイの分布は主として木曾谷および伊那谷の南部に限られ報告されていたが、筆者が南佐久郡佐久町の町誌のための調査の際1983年5月に抜井川の標高840mの平川原地籍でヤシャゼンマイの1株を見つけた。生育場所は水の流れから1.5mほど離れた岩の上のわれ目で、根株の直径30cmほどの株で、葉が25枚ほどで草高40cmほどとなり、孢子葉も7~8本つけていた。

佐久地域からは現在までのところ報告がなく初発見と思われる。その後、佐久教育会の植物研究委員

会の人々や、羊歯に詳しい大塚孝一さんにも見ていただいたが、ヤシャゼンマイにまちがいないとのことであった。1985年に観察した時には、株の周辺の岩場のわれ目で、前にはなかったと思われる地点に小さな芽生えがいくつか発見できたので増える傾向にあるようにも思われる。また、この第一発見地から300mほど下流の水辺の岩場にも、これよりは大きい株があるのを見つけた。

奥原先生のお話では、その付近にオオバヤシャゼンマイもあるかも知れないとのことであるが、佐久地域にはゼンマイの個体数が非常に少ないので、みつかるかどうかわかりません。(中山 洸)



佐久のヤシャゼンマイ 1983年5月28日
(南佐久郡佐久町平川原 標高840m)

〔新刊紹介〕 久保田秀夫・松田行雄・波田善夫

「白根山の植物」 B5判、カラー図版18頁、全117頁、付表5、着色2万5千分の1現存植生図、栃木県発行(1985)、非売品。

シラネアオイやシラネニンジンをはじめ、シラネアザミ、シラネニガナ、シラネザクラなど、白根の名を冠した多くの植物で知られる日光白根山(2577m)を中心に、亜高山地域の植生と植物相等についてまとめている。特別保護地区の自然環境保護対策に関する基礎資料収集のために行われた研究調査報告書ではあるが、群落名や植物名には全て学名が付けられ、装丁もきちんとした立派な学術書である。特に、植生については、植物社会学的な立場から調査され、シラビソ-オオシラビソ群集以下、天然生のカラマツ群落、ミヤマハシノキ-ダケカンバ群集、高茎草原のオトネアザミ-シラネアザミ群落、偽高山的な風衝地植生等、19群落にわたって詳細な組成が記載されている。既刊の尾瀬や谷川岳近辺に加えて、日本海と太平洋側の接点に当たる北関東山地の地域植生誌に、また貴重な文献が増えたことになり、高く評価されよう。(和田 清)